
デジモンアドベンチャー短編集

たなか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー短編集

【Nコード】

N7805S

【作者名】

たなか

【あらすじ】

この作品は二次創作であり、出版社様、その他関係者様方には一切関係ありません。

また、血のつながった兄妹の恋愛や、残酷表現などもありますので、そういった表現に嫌悪を抱かれたり、気分を害される方はご遠慮ください。

願い (※近親の恋愛表現あり) (前書き)

デジモンアドベンチャー 短編第一弾。
ヒカリ↓太一

願い (※近親の恋愛表現あり)

——決して叶うはずのない願いだった——
——ただどわたしは——

「お兄ちゃんサッカーしに行くの？」

青いジャージを着崩している兄に声をかける。

今日のように晴れた日曜日には決まってサッカーをしに出かける。
だから今日もそうなんだろうなと思っていた。
しかし、

「いや、今日はちょっとな。」

と珍しく言葉を濁す兄を、不審に思った。

まさかデート？

いやいくらなんでもデートにジャージはないだろう。
ではなんだろうか。

「何しに行くの？」

疑問をぶつけてみる。兄が自分に甘いのは承知なので、教えてくれるだろうと高をくくっていた。

「・・・どこだっていいだろ。お前に関係ないし。じゃあ俺行くから。」

兄はそう言って、玄関から出て行った。

家に一人取り残された私は、激しく動揺した。

今まで兄にあのように、言葉をかけられたことはなかった。

ひどく心が震えた。

私はなにかしたのだろうか。ただ尋ねただけだ。しかしそれが気に障

ってしまったのかもしれない。

こうなると思考はどんどん悪いほうに沈んでいく。

兄に嫌われたくない。たとえば、ただの妹としか見られていなくても。

私は八神太一が好きだ。兄妹としてではなく、一人の男性として。

自覚したのは小学5年生の時だ。空さんとヤマトさんが付き合うことになり、お兄ちゃんの外では普段通りに振舞っていたが、家に帰ると部屋でふさぎ込んでいた。

私だったらこんな思いさせないのに。

その時だ。私が実の兄を一人の男性として見ていることにきづいたのは。

当時の私はそれが世間一般では、受け入れがたいことだとわかっていた。

何度もあきらめようと思った。

でもだめだった。

どうしようもないほど好きなのだ、彼のことが。

高校2年生になった今でもそれは変わらない。

今なお胸の中で燃え続けるこの想いは、伝えることができるはずがなく、行き場をなくし、どんどん大きく膨らみ、破裂寸前だ。

伝えるわけにはいかない。

出口の見えない思考の迷宮を彷徨っているうちに、大分時間がたっていた。

もう夕方か。

兄は未だに帰って来ない。

何かあったのだろうか、と心配になってきたころ。

「ただいまー。」

玄関のドアが勢い良く開き、思い人である兄の快活な声に安堵した。しかし、今朝のことを思い出し、気分は沈んだ。

「おかえり。」

兄は、おう、と返事をし、手を洗いに洗面所に行った。

ずいぶん機嫌がよかったから、何かいいことがあったのだろうか。そう不思議に思っていると、いつの間にか兄は自分の後ろにいた。

「つきゃー!!」

と、驚きの声をあげると、兄はしてやったりといたずらな笑みを浮かべていた。

すかさず私が非難しようとする、目の前にかわいらしく包装された箱があった。

私が訳が分からなく戸惑っていると、

「開けてみ。」

と言われたので、訝しみながら包装を解いていく。

中には少し不格好な苺のショートケーキがあった。

上には、ヒカリいつもありがとう、と書いてあるチョコレートがのっていた。

「これって・・・」

「今日さ。空たちに頼んでケーキの作り方教えてもらったんだ。でも、俺エプロン持ってないだろ。だからジャージならよれてもいいかなって。」

茫然としている私にかまわず兄は続ける。

「お前にはいつも助けてもらってるからさ。なんかお礼がしたかったんだ。」

だからお前の好きな苺のショートケーキを作ったんだ。ちょっと見た目はあれだけど

味は大丈夫なはずだから。だからさ・・・ヒカリ、いつもありがとな。」

へへと、少し照れたように笑う兄に、視界が歪んだ。

すると兄は慌てて、私を気遣ってくれた。

ふふっ、やっぱりお兄ちゃんは優しい。

「ありがとうお兄ちゃん。とっても嬉しい。私もお兄ちゃんにいつもお世話になってるから、

お礼がしたい。」

涙をぬぐいながら、私は彼の頬に口づけた。

軽いキスだ。でも私にはとても重い意味のあるキスだ。

「お、おおい。今・・・。」

兄が顔を赤らめて、おろおろしている。
それがおかしくて、つい笑ってしまった。
かわいい。

「つうううう。ヒカリおまえなあ!!」

上気した顔で私を捕まえようとする兄に、私は背を向け部屋に逃げるために駆け出す。

その時後ろで、待てえ、と怒鳴る声が聞こえたが、無視する。

兄は意外に初心だから、まだ顔が真っ赤だろうな。

かくいう私も真っ赤だが、それを見られたくないので必死に部屋まで逃げる。

さっきまでの憂鬱が吹き飛んでいく。

本当にいい気分だ。暖かい気持ちで胸が満たされていく。

私たちは兄妹だ。血がつながっている。

でも、伝えられなくても、愛し合えなくても、私はあなたといたい。
それが、あなたを苦しめたとしても、離れることなんてできないだろう。

——お兄ちゃんごめんね。でも好きなんだ——
——だから、これからも好きでいさせてください。これからも
傍に居させてください——

タイトル仮（前書き）

シリーズモノです。

第三話まで予定。

タケル↓ヒカリ↓太一

タイトル仮

「お兄ちゃん」

その言葉を聞くと、どうしようもなくイライラする。
だって彼女の思い人は・・・。

「タケル君、今日放課後空いてる？」

席に座って、窓の外を眺めていると不意に声をかけられた。

今は昼休みの時間だ。ほとんどの人は昼食を食べ終えて話で盛り上がってる。

僕はあまり騒ぐのは得意じゃないけど。

そう思考した後、目の前の少女に意識を向ける。

「空いてるよ。」

「良かった！！今日ね。お兄ちゃんの誕生日プレゼント買いに行こうと思ってるの。」

それでアドバイスがほしくて・・・」

当然僕の答えは決まっている。

「うん。いいよ。僕でいいなら。」

「ありがとう。じゃあまた放課後にね!!」

彼女は笑顔で教室を去って行った。

その後ろ姿を見えなくなるまで目で追いかけていた。

こんな些細な会話でさえ、幸福を感じられる。

少し自分が痛い奴だと思いつつも、止められない。

会話後、周囲の男子に羨ましがられて、ちょっかいを出されたが無難にあしらっていく。

いつものことだ。

ヒカリは変わった。

積極的に未知の世界に飛び込んでいくようになった。

体型はすらりとしていて細く。

手足は長い。

また胸も大きいわけではないが、それなりにある。

そしてなにより顔がかわいい。

昔はかわいい印象が強かったが、今では美しさも加わり例えようもないほどだ。

そのため、男子からの人気はものすごい。

しかも、其の人柄のためか、ありがちな女子からの妬みなどもない。そして一番は変わったのはその明るさだ。

以前は、ふとしたときに顔に影が落ちることがあった。それが原因で言い争いになったこともあった。

だけど今はそれが見えない。

良いことだと思う。

頼ってもらえなくなったことは少し残念ではあるけど。

放課後、プレゼントを探すために店を見てまわった。

スポーツ用品店、服屋、にアクセサリーショップ。

彼女は、終始真剣な表情で商品を眺めていた。

アドバイスをほしいのでは？と思ったが止めた。

馬の耳に念仏だろう。

それに、今なら見つめていても、何も言われないし。

結局、次に声をかけられたのは、最後の二つまでに絞った時だった。

「タケル君どっちがいいと思う？」

すでにサッカーウェアを買っていて、あまりお金が残ってないという。

手の上にあるのは二つのキーホルダーだ。

ひとつは、日本代表のユニホームを着たクマのもの。

もうひとつは、サッカーボールと、T・Yとイニシャルの入ったプレートがついてるもの。

クマのほうを太一さんが付けているのを想像してみる。

似合う、しかし彼は好まないだろう。

文句を垂れるのが目に見えてる。まあかわいい妹からのプレゼントだから

しぶしぶつけるだろうが。

「僕はこっちのほうが太一さんに似合うと思うよ。」

結局、無難な方をすすめておくことにした。

「そうかな。・・・うん、そうだね!! ありがとう。じゃあ買ってくるね。」

嬉々として、レジに向かう彼女に苦笑を漏らしてしまう。
まったく、ほんとお兄ちゃん子だなあ。

会計をすまし、店を出た僕は休憩がてら喫茶店にはいった。
物静かなところで、音量の低い洋楽が耳に心地よい。

いい店だな。

それぞれ飲み物を注文した後、彼女がおもむろに手を僕のほうに出してきた。

ラッピングされた袋が乗っている。

「タケル君、はいこれ。」

僕は、よくわからなかったが受け取り、開けてみてと言われたので、

丁寧で袋を開ける。

中には僕のパートナーにそっくりのキーホルダーが入っていた。

「これどうしたの？」

「今日付き合ってくれたお礼。散々連れまわしてごめんね。
でもおかげでいいものが買えました。ありがとう。」

そう言って微笑む彼女に、固まってしまう頬が熱を帯びるのを感じる。

反則だよ。その顔は。

しかし次の瞬間彼女の笑顔が強張った。
視線の先を見ると

そこには、知らない女性と手をつないで歩く、太一さんがいた。

タイトル仮2 (※近親の恋愛表現あり)

店の傍の道を歩く幸せそうな二人を眺める。

モテるのは知っているけど、あんなきれいな人と。

でも、すごく仲がいいなあ。羨ましい。

いつか僕もあなりたい。

もちろん向かいに座っている彼女と。

「太一さんって彼女いたんだね。ヒカリちゃん知って」ガタッ

言い終わる前に彼女は急に席から立ち上がり、お金を置いて店を出

ようとした。

僕は状況についていけず、少しの間ポカンとしていた。

が、我に返ると慌てて伝票を掴み、レジで会計を済ませると彼女の後を追った。

彼女はもう夕方も終わろうとしているのに、家とは違う方向に向かっている。

「ヒカリちゃん待って!!」

そう声をかけるが、まるで聞こえてないかのように何の反応も見せず、彼女は歩き続ける。

僕は走って彼女に追いつくと、腕をつかんで制止させた。

彼女は僕の腕を振り払おうとするが、離すつもりはなかった。

それでもなお抵抗を続ける彼女に、僕は家に帰らないのか、と尋ねた。

「いや!! 帰りたくない!!」

「じゃあどうするの? もうすぐ暗くなるし、危ないよ。」

彼女は押し黙った。

行先など初めからなかったのだろう。一人にさせるわけはいかない。いくら日本が治安がいいとはいっても、夜に女の子が一人で歩いていると、

何があってもおかしくないのだから。もし彼女になにかあったら僕は・・・。

「ここ僕の家付近だから、僕の家に来る？」

彼女は少しの間迷っていたようだが、最終的に僕の提案に乗った。

家につき、中に入るように彼女を促すと、僕はドアを閉め鍵を閉めた。

飲み物は紅茶でいい？と聞くと、頷いたので、

淹れてる間くつろいでて、と言ってキッチンに向かう。

マグカップを二つ出し、パックの紅茶を入れる。

普段の僕ならこの状況に喜ぶだろうが、今はなにか嫌な予感がしている。

そのせいだろうか、僕は時間をかけて紅茶を淹れた。

できた紅茶を持って居間に行き、テーブルの上に置いた。

彼女はソファの上で、ひどくつらそうな顔で座っていた。
その顔を見ると、胸が痛くなる。
彼女をそんな顔にさせている原因は、恐らく・・・。

「はい。どうぞ。」

「ありがとう。」

僕は、彼女に喫茶店での行動を聞くべきか迷った。
恐らく、この問題は彼女にとって相当デリケートな問題だ。
他人の僕が触れるべきではないのかもしれないが、
そう考えながら、彼女の顔をチラッと見る。
先ほどのままの顔で、紅茶には手を付けずにただ、カップを見つめ

ている。

そんな顔するなよ。

結局、ぼくは自分の推測を、確認するために彼女に尋ねることにした。

「なんで、突然店出て行ったの？」

「・・・・・・」

ヒカリは答えない。答えることを拒否しているようだ。
僕はそれに構わず続ける。

「太一さん見てからだよね？様子がおかしくなったの。
・・・・もしかして、太一さんが女の人といたから？」

彼女は、俯いた。

その行動を見て、やっぱり、と思わず言いそうになったが、押しとどめた。

「そうなんだ。でも、太一さんだって彼女いたっておかしくないし、ヒカリちゃんが太一さんのこと好きなのはわかるけど、そろそろお兄ちゃん離れしないと・・・」

そこで彼女は、勢いよく顔を上げ僕を睨み付けた。

「お兄ちゃん離れ？なにそれ？私がお兄ちゃんのこと好きで何が悪いの！？」

その勢いに、気圧されるが、僕は言わなければならないと己を奮い立たせる。

本来なら自分で気づくことだ。

いや、彼女のことだ、もうすでに気づいてはいるのだろう。

それでも認めたくない、認められないってことなのだろう。

それならば、言うしかない。

兄妹いつまでも一緒にはいられない、って。

「悪くはないけど、太一さんだって恋愛ぐらいするから、そんなことでいちいち怒ってたら・・・」

「私は怒ってない！！勝手なこと言わないで！！」

言葉は途中で遮られてしまった。

僕は彼女の言葉に不覚ながら、苛々してしまい、怒鳴ってしまった。

「怒ってるじゃないか！！だいたいヒカリちゃんは太一さんに依存しすぎなんだ！！」

まるで太一さんのこと恋愛対象としてみているみたいじゃないか！！」

ヒカリは絶望感で顔を染め、固まってしまった。

その表情は自分の犯した罪がばれてしまった、犯人のようにも見える。

それは、つまり、自分の言葉を肯定していることに、他ならないのではないか。

しかし、それを肯定したとするなら、彼女は実の兄に対して……。

「まさか……本当に？」

ビクッと、

その反応から、事実なんだと悟る。

でも、そんなの、そんなこと認められない！！

だって二人は！！

「だってヒカリちゃんと太一さんは兄弟じゃないか！！どうやった

って」

「言わないで!!」

「つつつ!?!」

「そん、なっ・・・そんなこと、言われなくなっただけわかってる!!」

タケル君こそ何もわかってないくせに!!

私が今までどれぐらい苦しかったかわかる!?!

兄弟だから!! 兄弟だから!! 兄弟だから!!

こんな言葉のために私は好きな人に気持ちを伝えることもできない!!!!

彼女ができたってなにもできない!!

妹としてしか見られない!!!!」

彼女は叫ぶように言い切った後肩で息をし、

今度は、弱弱しく呟いた。
その姿は、まるで、懺悔のように僕の目には映った。

「私だって・・・どうやってこの想いが叶わないことぐらい、わかってる。

諦めたほうがいいことも。

だけど、できない。

一生消えないよお・・・ふっ、くう・・・」

僕は初めて、過去から今まで尊敬し続け憧れた人に、黒い感情を抱いた。

兄の奮闘（太一、ギャグ）（前書き）

太一さんのキャラが崩壊しています。

兄の奮闘（太一、ギャグ）

俺の名前は八神太一。高校2年生でサッカー部に所属している。頭はそれ程よくないが、運動神経は自他ともに認めるほど高い。そしてこれが一番重要だが、俺には妹がいる。

だが、俺の妹をそんな所そこらの妹と同じにしないでもらいたい。俺の妹、八神ヒカリは、頭がよくて、気立てがよく、誰にでも優しく、仕草やなんやらすべてが可愛い、まさに神に愛されし妹だ。しかし、そんなパーフェクトな妹がモテないわけがなく、毎日のようにデートの誘いやら、告白やらが絶えない。

俺は、不埒な男子どもから妹を守るべく日々命がけの戦いに望んでいる。

これはそんな俺と獣たちとの戦いの一コマである。

ある日の放課後、俺は友人たちと他愛もない話で盛り上がっていた。今日は部活もないので、下校時間までかかるかもしれない。

そんななか友人Aが浮かない顔をしている。

こいつ、先日マイスイートシスターに会ってからというもの、ずっとこんな調子だ。

それも仕方がない。あの愛らしい姿が目には焼き付いて離れないだろう。

わが妹ながら困ったものよ。また一つ罪をつくりおって、フフフ。俺がニヤついていると、友人Aは唐突に話し始めた。

「ヒカリちゃんってすげーかわいいよな。」

何かと思えばそんな当たり前のことを。まあ、それもまた仕方ないか。

「ああ、そうだな。ヒカリはの可愛さは地球を滅ぼすほどだ。」

「今彼氏とかいるのかな？」

馬鹿がそんなわけあるか。俺の情報網を甘く見るなよ。

「いるわけがない。もしそんな奴いたらこの世に生まれたことを後悔するほど切り刻んでやる。」

「いないんなら俺告白しようかな？」

ピキッ

その瞬間教室の温度が明らかに下がった。

今までの和やかな空気はもはやなく、室内は俺から発せられる冷気で満たされていく。

クラスメイト達はその空気を敏感に感じ取り、いつでも脱出できるように準備していた。

そんな不穏な空気のなか友人（仮）Aはしゃべり続ける。

「・・・俺、やっぱ告白する！！そして彼女を幸せにして見せる！！・・・その前に」

俺の怒りで教室が揺れ始めた。

これはそろそろ暗黒モードに突入する合図だ。

この状況に教室中が息を飲んだ。このままだと学校が消えてしまう。

クラスメイト達は皆切に願っていた。あのセリフだけは言うな。しかし、無情にもその思いは届かなかった。

「太一。いやお兄さん。ヒカリちゃんを僕にください!!」

「殺すぞ」

普段からは想像もつかない程低い声で、短く言い放った。
デビモンや、ヴァンデモンさえも裸足で逃げ出すであろう殺気をプラスして。

この暗黒モードの俺の殺気に耐えられる奴など普通いないが、いかんせんこいつは普通じゃなかった。

目の前の友人（仮）Aはこのオーラがまるで見えていないかのよう（実際見えていないのだろう）平然としている。

ほかのクラスメイトは皆教室から避難したというのに。
そしてなおもこいつは続ける。

「俺は一生ヒカリちゃんを幸せにしてみせる!!」

しかーし!! 太一・・・お前が愛し合う二人の行く手を阻むというなら

いくら親友とはいえ手加減しないぜ!!」

「・・・このモードの俺にここまで言った奴は今までいなかったぜ。

その点ではお前を認めてやろう。

でもな、お前程度の男がヒカリを幸せにするだと？このたわけがっ！！

学力C、運動能力C、容姿C、財力C、自信過剰SSのモブキャラが、

全パラメータSSのヒカリと釣り合うわけないだろう。

そんな愚かなゴミには、この俺が早々に引導を渡してくれよう。」

俺たちは互いににらみ合う。

これは先に動いたほうが負ける。俺たちは直感で理解していた。呼吸が荒くなり、緊張のためか汗が額から流れ落ちる。

それほど緊迫した状況ということを感じてほしい。

そしてそれは唐突に終わりを告げた。

俺の携帯に着信を告げる音楽が鳴ったからだ。

聞きなれた着うたに、俺は瞬時に通話ボタンを押す。この間0、2秒。

先ほどまでとは違い、普段よりもさらに、優しい声で電話に出る。

「もしもし。」

『もしもし。ごめんね、突然電話して。お兄ちゃん今大丈夫？』

「ああ。大丈夫だ。なんかあったのか？」

『えーとね、今日お父さんとお母さんが二人で出かけるから、晩御飯を久しぶりに外食でもどうかと、思ってた。』

「そうだな。久しぶりに外でおいしいもんでも食うか。」

『やったあ。お兄ちゃんいつごろ帰ってこれる？』

「ちょっと待っててな。」

俺は携帯電話を横に置き、友人（仮）Aに向き直った。

電話を終えるまで待っていたのだろう、その場に臨戦態勢のまま立っている。

だが、もうその必要ない。なぜなら、もうお前は死ぬのだからな。

「ふふ、俺の本当の力を見せてやろう。光栄に思うがよい。」

俺の体からは多量の暗黒のオーラが滲み出す。
それはかつて闘ったダークマスタースターズやアポカリモンの比ではない。
今なら俺一人でデジタルワールドを占拠できるだろう。
そして、ゆっくりと拳を握り、奴に近づく。

「バ、バカな！？明らかに人間の戦闘力を超えてひでぶ」

友人（仮） Aは俺の百の拳打によって、瞬く間に肉塊に変わった。
こんな姿になっても生きているのは、さすがといえよう。
意識を電話に戻す。

「ヒカリ今から帰るから、映画に行ってそれから食事にしよう。」

『うん。私見たい映画あったんだあ。楽しみに待ってる。・・・ねえ、なんか変な音がするけど。』

床に転がって唸っている友人・・・じゃなかったゴミの口を足で踏んで塞いだ。

まったく、汚らしい声を出しやがって、ヒカリの天使のように愛

らしい耳が腐るだろうが。

「ああ、友達がちょっと怪我してな。まあたいしたことないし大丈夫だ。

じゃあ用意しておいてな。」

『そうなんだ……。お友達早く治るといいね。じゃあ早く帰ってきてね。』

俺は電話が切れたことを確認し携帯をしまった。

床に転がっている元友人（仮）Aに目をやる。

さて、コイツをどこかに埋めておかなければ。

最近中庭に木を植えるための穴が掘られていたから、あそこでいいか。

もはやゴミと化した元友人（仮）Aを引きずりながら、教室を後にする。

目的の場所に行く途中、すれ違う人は、皆こちらを見ないように目をそむけ、道を開ける。

その顔は青く恐怖で引き攣っており、その場で気絶する奴もいた。

対照的に俺はこれからの妹とのデートに胸を躍らせているため、満面の笑みで鼻歌まで歌っている。

後ろにゴミAを引きずりながら。

そして、家に帰り、俺とヒカリは映画を楽しんだ後、洒落た洋食屋で食事し、心身ともに満足のいく一日を終えた。
また、友人Aは後日ゾンビのように復活し、懲りずに迫ってきたので再び埋めておいた。
今度のもっと深くに。

エイプリルフール ヤマトの災難（前書き）

私の中では、なぜかヤマトさんはギャグキャラになっている。

エイプリルフール ヤマトの災難

唐突に電話がかかってきた。

相手は八神太一、俺の親友だ。一番気の置けない仲といっても過言ではない。

少し短絡的なところはあるが、強烈なリーダーシップ持ち、いまいちまとまりのない（光子郎談）

俺たち選ばれし子供たちをまとめあげてきた、勇敢で頼れるやつだ。そんなあいつが、

「お前とは絶交だ。もう俺に話しかけてくんないよ。」

「えっ？」

「じゃあな。」と言いつつ電話は一方的に切られてしまった。

「どういふことだ。急に絶交だなんて、俺なんかしたか？」

考えても、なにも思い当たるふしはない。つい先日二人で遊びに行つて、帰り際「また行こうぜ。」と、あいつも上機嫌で別れたはずだし、自分が何かしたとは思えない。

とりあえず、詳しい話を聞こうと思い、太一に電話をかけるが着信拒否されていた。

戸惑いながら、今度はメールを送るがこちらも受信拒否。

俺はあまりの衝撃にダウンをきつてしまった。

再び電話が鳴る。すぐさま通話ボタンを押す。

「太一か！！お前なんで」とそこまで言ったとき、

遮るように「ヤマト君。私だよ。」と明らかに太一より高い声が発せられた。

彼女は武之内 空、俺の彼女だ。言っておくがシャレじゃないぞ。中学2年生の時に付き合っていて、俺にはもう空はなくてはならない存在だ。

そんな彼女が

「ヤマト君、別れましょう。」

「えっ？」

「じゃあね。もう連絡してこないでね。」と言いまた一方的に切られる。

「なんでだああー！ー！ー！ー！ー！ー！」

今日2回目のダウンをきってしまった。

頭を抱える。

「俺は何かしただろうか、いやしていない」反語で表現しても現実には変わらない。

そんな、意識をあっちの世界に逃避させていると。

「お兄ちゃん。なに叫んでんの？」と部屋のドアが開いた。

「タケルううう。」

こいつはタケル俺の弟だ。才色兼備で性格もよく、俺に懐いてくれている。

なんとも可愛いやつだ。目に入れても全く痛くない立派な弟だ。

「もうタケルがいるばお兄ちゃん他に何もいらないよ」と先ほどのダメージを忘れようとするが、

「キモいんだよブラコン野郎。ずっとみんなに自分の兄だっというのが恥ずかしかったよ。」

しかも、ベタベタしてきてうざいし。そういうわけで、もうお兄ちゃん僕の兄じゃないから。

「じゃあね、屑。」

そう笑顔で言って颯爽と去っていた。

最愛の弟にまで辛辣な言葉をかけられて、俺は完全にノックダウンされた。

まさにK・O負けだ。何に負けたのかは知らないが。

「死のう。」そう呟いた。

俺は“なぜか”近くにあったロープを持ち、そしてまた“なぜか”近くにあった椅子に立ち

「親父、お袋先立つ不幸をお許しください。」

そう言って椅子を蹴り飛ばそうとした瞬間。

急にドアが開き、中に7人の人間が入ってきた。

それはさっき俺の心を粉碎した3人を含んだ、選ばれし子供たちだった。

そして手には「ドッキリ大成功!!」と書かれたプラカードを持っている。

ドツ
キリ大成功？

ん？

.....!

まさか！？

カレンダーを見る。

日付は“4月1日”。

まさか、今日は、「やつと気づいたか、今日はエイプリルフルだ。」と太一が俺の考えていたことを代わりに言った。

茫然としている俺を尻目に、奴らは

「やっぱりヤマトにしてよかったな。」（太一）

「あのリアクション最高でしたね。」（光子郎）

「（机をバンバン叩きながら）ヤマトさん最高っつ。」（ミミ）

「お兄ちゃんww」（タケル）

「ヤマト君ってクールぶってるけど、なんか芸人気質（？）だよな。」

」（空）

「私のお兄ちゃんじゃなくて良かった。」（ヒカリ）↑何気にヒドい

「僕は止めたんだけどね。」（丈）

などと勝手なことぬかしやがった。

そして、あのロープや椅子も奴らの仕業だった。

俺は体中がやつらへの怒りで沸騰しそうになる。

そして、

「お前らぶっ殺す!!」

ヤマトは暗黒の力を手に入れた。

太一は逃げ出した。

空は逃げ出した。

タケルは逃げ出した。

ヒカリは逃げ出した。

ミミは逃げ出した。

光子郎は逃げ出した。

丈は恐怖で足がすくんで動けない。

ヤマトはみなごろしをつかった。

丈に37564のダメージ。

丈は倒れた。

ヤマトは経験値2を手に入れた。
太一の通報により、警察A、B、C、Zが現れた。
ヤマトは警察に逮捕された。

エイプリルフール ヤマトの災難（後書き）

丈さん W W

約束（前書き）

まさかのヤマト×ヒカリ。太一さんは亡くなっています。
苦手な方は読むのはやめてください。

約束

太一が死んだ。

その知らせを聞いたのは、ちょうどアメリカから一時帰国した日の深夜だった。

疲れもあって熟睡していた俺を起こしたのは、弟のタケルからの電話。最初は「こんな時間に誰だよ」、と眉を寄せたが、弟からだとわかってからは速かった。

すぐに通話ボタンを押し、電話に出る。

「お兄ちゃん!!」

ひどく慌てた声。俺は妙な胸騒ぎを感じた。

「どうしたタケル。こんな時間に」

「そんなことはどうでもいいんだよ。太一さんが……」

「太一がどうかしたのか?」

タケルは少し言い淀んで、「……太一さんが……トラックに轢かれて……それで、今病院で手術してるんだ」、と途切れ途切れに呟いた。

「太……い、ち……」

茫然。その言葉がふさわしい。俺は携帯を落としたことにも気づかず、頭が真っ白になる。足が床から離れない。

それから、どうやって太一のいる病院にたどり着いたのかはわか

らない。いつの間にか着いた病院で案内されたのは霊安室。その時の衝撃は今でも忘れられない。

(ウソだろ……!?)

乱暴に扉を開ける。一斉に視線が集まった。

「ヤマトさん……」

光子郎の声が聞こえた。が、俺はそんなことは気にしていられなかった。急いで、部屋の中央に設置されているベッドに駆け寄る。

「……太一……」

外見はひどいものだった。かろうじて原型を留めているが、正直、これが親友だったなんて信じられなかった。

一向に動かない俺にタケルが声を掛ける。

「お兄ちゃん……」

弟の声がひどく遠く感じる。正常に働かない頭。冷静さなんて欠片も残っていないかった。だからだ。

こんなことを言ってしまったのは。

「……なあ……ウソだろ？」

部屋に居る全員の顔を見渡す。そこにいたのはミミを除いた選ばれし子供たち。みんな顔には悲痛の色を浮かべている。

「お前ら……これが太一だって本気で言ってるのか？ んなわけないだろ？ どうせドッキリかなんかで俺を騙してるんだろ？ ……」

なあ!! そうなんだろ!!」

「ヤマト……」

「ヤマトさん……」

俺は怒鳴り声をあげたせいで、肩で息をする。呼吸がうまくできない。まるで水を失った魚だ。

苦しい。誰か助けてくれ。

「……ウソだったらどんなに良かったか……」

静寂が訪れていた部屋に、落とされた一つの声。

その声は良く知っている人物のもの。太一の妹——ヒカリだ。

「……ヒカリ……ちゃん……」

俺は驚愕の目で彼女を見る。

「ウソだったらどんなに良かったか!!　これが夢だったらなんて何度考えたか!!　それでも!!」

少し荒くなった呼吸を整えるように、彼女はスカートの強く握った。

「……それでも、これが……現実なんだよ」

（なんて悲しい眼……）

胸が引き裂かれるような痛みが走った。彼女の眼は、この部屋の誰よりも暗く、冷たく、そして――色がない。

まるで、正の感情をどこかに落としてしまった。そんな眼だ。

「……ごめん」

俺の謝罪を最後に、この部屋で話をする者はいなかった。

その後、太一の葬式は身内の間でひっそりと行われた。しかし、生前彼に世話になった人たちがたくさんいて、その人たちが葬式後、太一の家に押し寄せる結果となった。これも彼の仁徳ということか。皆が故人を惜しむ中。俺は親友以外のことに心を奪われていた。目が追うのは一人の少女。生気のない表情で、まるで心ここにあらず。彼女の周りだけが世界から切り取られたかのように色がない。そんな感じ。

俺はいてもたってもいられず声を掛ける。

「ヒカリちゃん」

彼女はひどく緩慢な動作で振り返る。

よかった。どうやら声は届いているらしい。

「……ヤマトさん……なんですか？」

「……なにか食べないと……身体がもたないよ」

何言っただ俺は。もっと他に言うべきことがあるだろ。自分を殴りたい衝動に駆られた。

「大丈夫です。今お腹減ってませんから」

「放っておいてください」と最後に小さく付け足した彼女に、言い表せないほどの怒りを感じた。

「太一はもう戻ってこないんだ!!　くよくよしてたって仕方ないだろ!!」

しまった、と後悔が頭を満たす。彼女の顔を見ると俺以上の怒りを湛えていた。

「なんでそんな風に考えられるの!?!　お兄ちゃんの死はそんなに簡単に割り切れるものじゃない!!」

わかっているさ。君にとって太一がどれだけの存在だったかなんて。それでも、

「それでも、俺たちは生きているんだから、このままではだめだ。もっと自分を大事にしなくちゃ」

「そんなことあなたに関係ない!!　もう私のことはいいからほっといて!!」

それを最後に彼女は黙り込んでしまった。俺もこれ以上どう声をかけてよいのかわからなかったのも、その場はそれで終わった。

けれど、どんなに時間が経っても、何をしていても、彼女のが頭から離れない。今日はちゃんとご飯を食べただろうか。少しでも元氣は出ただろうか。……独りで、泣いていないだろうか。

いてもたってもいられなくなったので、八神家に行ってみた。そこで見たのはヒカ리를慰めるタケル。その光景を視界にとらえた時、ハンマーで殴られたような衝撃が身体を走り抜ける。

その時、俺の中に、ある得体のしれない想いが生まれて、その想いが俺を駆り立てた。

俺はそのまま何もせずに八神家を去った後、すぐにアメリカに戻り、大学に休学届を出した。そして日本でバイトしながら、できる限りヒカリの傍についてやった。

嫌がられても、罵声をあびせられても、叩かれても、泣かれても。

ずっとそばにいた。

どうしてここまでするのか、この気持ちは何なのか、初めはわからなかった。でも、ある日ふと気付いたんだ。

——俺は彼女のことを好きなんだ。

それからは、楽だった。霧が晴れるように、心が清々しくなった。ただ彼女と共にありさえすればいい。そして、ゆっくりでいいから彼女の傷を癒そう。ほかでもない俺の手で。

太一の死から三年が経った現在。

ある教会で結婚式が行われた。身内だけで行われたその式は、規模は小さなものだったがその分細部に力を入れた。

そして今まさに新郎と新婦が愛の誓いの口づけを交わそうとしていた。

「ヒカリ。俺で本当にいいのか？」

「うん。ヤマトがいいの。私はあなた以外愛せないから」

そう言ってほほ笑む彼女。その表情には負の感情は一切感じられない。本当に今を幸せに思っている。そんな顔だ。

「俺もだ。君を愛してる。一生愛し続ける。……一生守り続ける。約束だ」

そして二人の影が重なった。

太一。昔約束したよな、ヒカリを守るって。あの時は守れなかったけど、これからは何があっても絶対に守ってみせる。誓うよ。だから——ヒカリを、お前の大事な妹を、俺にください。

約束（後書き）

ヤマトでシリアスを書けないと言ったのは誰だったか。……うん、私です。

なんかやらかした感がありますが、後悔はありません。

突っ込むべき点は多々あると思います。が、皆さんの寛大な心でスルーしてやってください。お願いします。

更新遅くなったこと、深くお詫び申し上げます。

これからも亀更新になるとと思いますが、お付き合いいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7805s/>

デジモンアドベンチャー短編集

2011年10月9日00時43分発行